





巖作山大悲閣之圖  
 山頭十景

妙音觀櫻花  
 芹澤村鳴蛙  
 安積山晴靄  
 高場丘螢火  
 胡和瀧晚涼  
 那珂嶺皎月  
 錢城嶽餘雲  
 大熊川奔流  
 光明潭古柳  
 矢給渡行客



中材  
 俊定







旋陽許斗世爾揭焉至教臨時孝然不  
元報乃大いぬ 芭蕉の翁奥に西色端  
多等利乍出羽國立石寺不立一頃加能  
叢政尔實相此際約は亦いぬ 娘く父を遊  
し毛衣尔守初宿石番刻立翁の志ありけ  
暮此送風乃不朽を傳事、伊人念法風名  
の深妙者此佛さ子母か奈采寺地の清和  
尔當して空一の良翁とて底院主盧瀑程山

法中稿於の道一箇儀、予を杖こも刺程を  
碑院子流海毎く亦孝敬をれば安印南登此  
伊奈美が大何山の井邊浅良心毛て、當年  
那法をわねなぬ念一箇寧や打能其以  
是生せ立一瓢象此光長尔よ日一り、予を養ふ  
其迷しく、漸焚る角毎て及るれ、初み此  
字流る、しか孝を母以追所か風感事、亦乃  
得精よ、予をよ、ちて、秋の胸、翁を控す



高き天の中黄葉吹おるに山は海に風  
近き九連降く之頃が候る候の候に枯木も  
高き教字解脫の相と候し阿木限の久米  
形天月此歎は波を捲く心思へり海邊に  
の山清々母と女の可哀と云ふに教を解  
猶山故子の佳景也子て四寸の美形眉を  
兼た然然は肉形半知一形と此母子を梵  
刹遍備成の子清正風を捲く候を

寺の如き者も近き 大悲成神力の可也  
仰山は此志可成候母宜郁李南は海に云也

寛政九年丁巳秋九月

浅香里人不孤園露香謹誌





蕉の古人多しといふも、  
あつちふとて、  
住うよ人見の松の、  
ぬげしふたしして死ぬる、  
竹の露さしをよまほし、  
あふかなしとて、  
松の音やあふとて、  
月代りまゝとて飛ぶ、  
さし蟬とて、

去来

大抄

其角

嵐雪

松風

正秀

乙州

上小野

中村 俊定

あふ松やいしとて、  
蟬の音は、  
洗たる花を、  
逢坂やいし、  
みり松の音、  
聲よみ、  
世に留や、  
胡や、

智月

支考

杜國

之道

小枝

出芳

露川

法團

二代



家碑 生を名に海水を

まじりて好みの流る集よと心

松風色ささ母健能もとを礼り利山主 廬瀑

山暮日あまきいおほを礼てさみのく 露滴

いよの集よ好むもを流る集よと心 露國

鳴なるくは流る集よと心 秋の水 露森

松網 沓吟

秋のあまのくもや日もくは流る集よと心那山 たき

松のくはとほくくもを流る集よと心 英家

秋のあまのくもや日もくは流る集よと心 柏園

とを流る集よと心もを流る集よと心 兼太

煙さみの飛何くもを流る集よと心 子窓

世の網かきり列もなうり危大観 三日月







蟬墳やつりりのまよふもみち 葛井 為政

みゆてきみ飛一り丸一り 富田 環中

蟬守やふめの林の近一り 山井 宇重

きよもくやな塚とめをりて木の蟬 大槻 白滴

ちよきや観とせしめて蟬一り 高岡

郡山

赤しりきもまへやせとれ 伴魯

三日月のまへにけり 桐水

蟬守やまきり樹も志けき 田村山 耕林

杖あきりまきり樹とれ 九十二 得

まきり蟬やまきり 守山 月窓

まきり蟬やまきり 九十一 万里

まきり蟬やまきり 花遊

新樹のまきり 小泉 潭柳



くがのの降は夜をさしあす 三城目 以中

世子のともおとす 海老根 文古

夕よりの 朽山神 雲 芭夫

河見や 仁井丁 おまか 馬令 低室

さあ 文雄 馬令

射目人の 行脚 競ふ 来雅 本臨う

降 若作山下 ちや 産洞 ちや 産洞

あ 産洞 ちや 産洞

二五

山 井田 蜘蛛の網やの

小 咩也 峰峻や夜の

山 掬明 ちや 掬明 ちや 掬明

本宮

破 萬象 安 萬象 ちや 萬象

山 泉之 水 泉之 ちや 泉之

唾 梅子 ちや 梅子



私の蟬 寂へしてなきを 秋夫

細吟集の序に 秋夫の歌

後して 採りて 秋夫の歌

字超 蟬を 寂へして 推し 冥々

二本松

も 菊を 蟬の 其の 末の 暮端

し 花を 蟬の 月を 蟬乃 斗成

し 花を 蟬の 月を 蟬乃 斗成 醒夫

飛く 蟬の 其の 末の 暮端 費五

蟬を 蟬の 月を 蟬乃 斗成 與人

を 蟬を 蟬の 月を 蟬乃 斗成 乙調

信夫

塗土 蟬の 其の 末の 暮端 秋夫

出く 蟬の 其の 末の 暮端 律太

を 蟬の 其の 末の 暮端 九鳥

半の 蟬の 其の 末の 暮端 投電



新の世み風よ吹きてくさより利 仙臺 文世

母と住まぬら中や嫁りく 苗部 素御

まき程くよまき飛りゆく 秋田 史仙

烟の霞をたぬけしよ 秋田 五明

和ぬぬのり嫁り程のと 全津 妙蓮

なまぬくよ 全津 吉思

ふくし 三代 青阿

夕陽や 白坂 圓舎

本 岩瀬 雨考

松風の 白河 軒栗

忘れ 白河 深畊

津 岩城 幾重

際 岩城 竹皇



父を美に写るてよ門之ゆる相馬 千差

晩蟬や花露の山る今ちりるまに 芳深

料の者蟬ふを都一きやとて我骨江都 成美

るる日や推のこも本ふ蟬の歌上毛 原化

まつ蟬のきよき露るる朝日可都 翔宇

日ささちや日見えあの桶子蟬の歌お州 梅史

たふやさみき梅子老きるる 澁水

蟬のこもさへ五すおふしをえる浪花 大に丸

蟬のころり何とくーら 留免を原花洛 夫丸

さるるや根入しきまを是乃松 園更

蟬のこもさへ五すおふしをえる

ゆーしきまを是乃松尾陽 士朗

り、蟬のころり何とくーら 留免を原 白圖

如毛信州











塚のほく人乃志まきまよふ  
 成隣  
 詩に瘦の願もき人見ふて  
 兼太  
 顔いざくらも方僕いもとぬく  
 大彦  
 蘇の玉もつとくもささ乃の  
 淡水  
 兔息まきま狩ららの月  
 露國  
 松風の枝打鳥帽子せしむて  
 竹丈  
 世の灯とあけ守武の宮  
 子容  
 志原のれい鶴花もは浪菜花  
 九洲

衣く更くお笑の古こそ  
 湖要  
 心髪ま侍軍形ま世にまよふ  
 英家  
 了れ卒都波のまをてやるまめ  
 九老  
 為霜の燈く海世まめりくと  
 柏圖  
 あくらみれい妹もまよふ  
 長筈  
 思ふまや初瀬の河原も蘇まら  
 成隣  
 者耀もれく又位徳のころ  
 貞中  
 泥く死て瓜ひまや園もま  
 丈彦



長執とくろりお ち 犯るる所 赤瀧  
 都る免る所ゆり ち ち ち ち 子衣  
 はあ〜と娘お 此お 舞の宮とこ久 兼太  
 蓬生のお〜と 意ち 月の中〜 晋夕  
 夕川〜と〜 鹿のあ〜と 九洲  
 ま〜と男と 扱の求衣ち ぬあ〜と 露国  
 此幸の車 二度お〜と 船 竹夫  
 齒のぬけぬ 馬焼 美と〜と 湖要

竹本ら 子女 魏 ほ〜と 加お 淡水  
 花り 咲て ちまよ ぬち 妙喜寺 雲谷乃  
 ち〜と 拍 ち〜と 斧 沢のさ〜と 青二  
執筆

供茶  
 拜禮  
 拾香

満尾 唵 聲 耳 座 順



ほろそのあまたとりて奥田乃そせ之踏こぎ  
湯島の沼水ちりりて菰あつたかきねん人か  
して今もせよと残あつた人

風如書や思ひみこも花可歌み 花活 鏡多

これ法師の都出より社風の雲こえてまかしたる  
東人のことおもてあり形て紀行の如きなり

えあつる 彩茶もく礼一海青山 武江 蓼太

采女乃名をきりり神草杯の折をあまてといふ又言  
場中此海山の井乃海もあつたれ  
り可あやれも瓢子物をあつたの河もあり

とと等一のこせ海ま如ちる松葉、周竹

物こも一字して一回一回一日は白なれんとむ

言流やあつたる原ふまもくく 白雄

風土のまじりて事なれり物も白も思ひん  
やそつたあつたり松もあつた

さみあつたよ松一ま如雲 寺庵了、百明

それにあつた人も後つたもあつた  
よみあつたもあつた

あ鬼の骨りつた埋へるま如雲 加賀 佛仙

鬼もあつた里塚にありまもあつた  
根子松風定く日暮れと冥く云流て飯の  
まき作らるるまもあつたの幽なるあつた  
てまむくもあつた

あつたあつたあつたあつたあつた 尾陽 曉彦







稚女加子もあゝ〜〜千里如御事子も 文仙

秋風や世まつらう御世 掃女もあゝ〜 市施

（注）二七〜しむのまゝは掃女もあゝ御事子も  
月夜の夢もあゝ老若を忘るゝ〜ひねらるゝ人だ

霜飛や為葉よせしる 秋も〜免 相冥

む〜秋のまゝ〜〜〜利言 燒籠 州化

可辨もあや二回〜〜〜お子も 其白

い〜〜〜まわ〜〜社中のあ〜〜〜人あ〜〜〜不天  
の早せ〜〜今〜〜〜〜〜〜〜思ひ出て出

題ふふ

社中

左の如櫻千位女もあゝ〜 可辨 英家

ま〜寒〜や物交龍なるもる屋の雀 大老

飛〜秋のまゝ〜〜〜〜〜美時か 拍圖

迎〜子もあゝ〜〜〜〜〜〜〜花可辨 菜太

福〜子もあゝ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜月 晋夕

さ〜〜〜あ〜越〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜新 出芭

ハ〜〜梅のま〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜成備



いづれもむねのきりや、藤如角 淡あ  
志しむる子鼻くむ社の、夜ころか 竹丈  
都くく東山田如棠山子時ゆり理 湖島  
あう駒子ふ何年、まみ野川あ南 家金  
修り者とも入る川のきとむしりり村 貞中

五月晴る、赤茶の秋、は一日可難 古色  
かきこころの曾城、秋はなうもんか 晋ノ

秋のくも解き、旅人を現きこもる家 葉出家  
我庵をよきこもいよとか入こもる 成備  
かきこころの曾城、秋はなうもんか 晋ノ  
松風の二条入、這り、秋く、葉 大考  
笑もる子老り、芥子の山、ゆり、可那 子考  
まき葉あは、苗子起ゆ、く、藤子、く、南 大彦  
あう駒子、あう駒子、息と、ほく、あう、か 伴魯  
影の月ま、く、電、く、あう、め、あ、な 大洲



風を極く驚けぬ言をいさるる可那  
長熟尺とり虫の 這わくわく  
藤柳社の日送てちり子守屋  
七月やこれ以よまゐるさう天の河  
柏圖

春

志く梅花をよみぬかゝ娘使可難  
おゆそ月をえまあこれ海月と難  
まゝこれ子達と散て臆ち利  
冥々  
露滴  
子安

鶯能くもく夜明け 春能く  
露滴

夏

面もあて顔や 顔もあて向きり  
ちもくもくや 紫花のまじり  
さみしきや 夕日鳥あけ此も  
津傳や 浮世をわく能くの旬  
冥々  
露滴

秋

あや此室のりあててこも星の露  
冥々



薄雲よりあけぬ山もあはれはるる理 子窓  
秋の風 湯飯をくま一衣可那 露滴  
言燈籠 夜も柳花ちりふらるる 露滴  
あ

みうさお唯賣子出今可らわ 子窓  
波洗布 ぬより芦の枯りゆ来 露滴  
灯と舟して人よ急死おとまり 冥々  
都色のとらきき夜を此傳子幾利 露滴

原韻のふし仰いで申へまゝ歌

はららの山霜のたしよふまらるる 園更  
帷子り秋乃りしる日 通を遊子 丈九  
柳より海京見まそと 小春可那 萬象  
あゝめに牛の鼻水 一りりり利 秋夫  
新鹿や橋の葉溜りりりり 掬明  
おちる夜や砂子物ちねもふあり 叶々  
山松の 葉下 吹とる 秋乃風 半葉







寬政戊午嘉時青章

海香郡郡山 不認園社中著

田村郡堂坂 巖作山齋行

集冊忠堂之方之平日院內所出也  
志願海集之得可飽也亦如志之  
望



